

# 漱石ころ、その精神と文学

赤木昭夫 著 岩波新書

積ん読状態でしたが、やっと読み切りました。  
付箋部分をメモかしてみました。

夏目漱石と言う作家の「精神(ころ)」、つまり彼の「知的活動の成り立ち」を知ろうと目指すならば、彼の思考の結果としての哲学、彼の創作の結果としての文学、それを知らなければ始まらない。

**彼の精神活動の主要な中身は哲学と文学だったからだ。**  
これを基本的立場として、著作、作品を読んでいく。

漱石が期待した読みは、果たしてなされてきたか。

夏目漱石が読み、思索の糧とした原典資料に立ち帰って、そこから信頼できる漱石自身による記述証拠を発掘し、それによって漱石の作品に秘められてきたメッセージを明らかにする。

読者の意識、社会の意識をつかむ文学を生んだ漱石の姿と近代化以後の日本の時代精神が明らかになります。

「...ともかく僕は百年計画だから構わない」。  
彼が期待した読みは果たしてなされてきたか。  
『ころ』の基礎である『文学論』から漱石の哲学を見抜く。  
読者の意識、社会集団の意識をつかむ文学がその時代の精神を表す。  
“政治体制編”としての『坊っちゃん』、  
“倫理思想編”としての『ころ』、  
漱石の遺言に、初めて答ええいます。

目次：第1章 『坊っちゃん』の諷刺/  
第2章 明治の知の連環/  
第3章 ロンドンでの構想/  
第4章 文学は時代精神の表れ/  
第5章 エゴイストの恋/

## 第6章 私を意識する私はどこに/

## 第7章 『こころ』の読まれ方

やっと読み終わりましたので、まとめてみました。

赤木昭夫さんは、

漱石はどのような哲学があり、思想を作品として残してきたのか、夏目漱石が残した諸々の作品を見ながら考察を行っている。

### 第一章「『坊っちゃん』の諷刺」

文学作品の中には社会諷刺になるようなことも少なくなかった。「坊っちゃん」の中にもそういったものがあり、特に物語の中に明治時代における社会の批判をレトリックとして扱っていたほどであったという。

### 第二章「明治の知の連環」

元々作家になる前の夏目漱石は英語の講師や翻訳家としても活動していた。その講師の中での伝説として「I love you」について「月がきれいですね」と訳すように生徒に伝えたことがあげられる。もっとも明治時代における知は漱石にとってどのようなものを得たのかを取り上げている。

### 第三章「ロンドンでの構想」

1900年頃には英国に留学することになった。その留学には英語留学、さらには文学の留学としてもあったのだが、その留学の中で英国文学を読みあさったという。その読みあさった中で作家としての構想はどのように練ってきたのかを追っている。

### 第四章「文学は時代精神の表れ」

夏目漱石の作品には時代背景と思想が取り入れられることが多くある。その時代における文化や社会をそれぞれのことを表しており、なおかつ漱石が自ら触れた哲学もまた文学に反映している。

### 第五章「エゴイストの恋」

有名な作品の一つである「それから」について取りあげているのだが、その中では三角関係を描いているのだが、その関係はまさに「エゴイズム」と評するような意味合いを持っている。

### 第六章「私を意識する私はどこに」

夏目漱石の晩年の思想として「則天去私」がある。その四字熟語のある中で「私」はどこにあるのか、そしてその思想はなぜ形成づけたのか、そのことを取り上げている。

### 第七章「『こころ』の読まれ方」

夏目漱石の人生の一部を映し出しているように思えてならない名作として「こころ」がある。嫉妬や遺書などの描写もまた夏目漱石の人生の中で出てきたことを如実に表しているのだが、そもそもなぜ「こころ」がつくられたのかも含めて言及している。

夏目漱石は日本文学の中でも重要な位置を持っている作家としてあげられる。

その人が残した作品は今もなお名作として親しまれている一方で、夏目漱石の人生や思想が所々に織り交ぜられている。

その奥深さが本書にて表れていると言っても過言ではない。

## 【著者紹介】

### 赤木 昭夫

略歴:〈赤木昭夫〉1932年生まれ。東京大学文学部卒。NHK解説委員、慶應義塾大学情報学部教授、放送大学教授などを歴任。著書に「自壊するアメリカ」「ハリウッドはなぜ強いのか」「蘭学の時代」など。

### (感想)

夏目漱石ほど、作品が読まれた日本人の小説家はいないだろう。漱石の作品が好きな人は多いが、その理由は人それぞれだと思う。

真に迫る心理描写でハラハラしたい、  
行間に感じられる明治のゆったりとした雰囲気になりたい、  
一流の文体やユーモアを味わいたい、

などだろうか。

読み方がいろいろあるということが、むしろ、今でも読まれ続けている理由なのかもしれない。

以前読んだ『漱石と三人の読者』(石原千秋著、講談社現代文庫)という本のなかで、漱石は複数の層の読者を想定して、異なるメッセージを込めていた、ということが書かれていて、そうなのかと驚いた記憶がある。

本書も、また新しい漱石の読み方を提示する。

著者は、大胆にも、これまで百年間は漱石は正しく読まれてこなかった、という。

文芸評論の歴史に対するなんとも挑戦的な態度だ。

そこまで言えるものなのかという気もするが、とにかくそういう気概で書かれている。

著者が漱石の誤った読み方の筆頭にあげるのが、漱石の文学を「未完の『明暗』へと至る「則天去私」の道程だったと意義づけ」る解釈だ(p.212)。

則天去私は漱石の日記に登場する言葉だが、彼の死後直後まもない時期にはとくに、漱石の文学は則天去私、つまり我を離れる境地を目指したものだ、という解釈が広まったらしい。

しかし、著者によれば、「則天去私」は漱石が作文のティップスとして創作した概念にすぎないのであって、彼の文学の到達点でもなんでもない。

漱石が作品でやろうとしていたのは、明治という時代を文学で捉えること、そしてその時代の暗部を文学を通して明らかにすることだった。

そうした論を、主に「坊っちゃん」と『こころ』を取り上げて展開しています。

特徴的なのは、当時の経済状況(空前の好景気だった)や、政治的な状況(固定したメンバーによる腐敗が進んでいた)について、経済指標の数値や出来事の年月日を挙げて考察している点で、そういう細かいデータをもとに「漱石はこういう時代状況のなかで、こう考えたに違いない」ということを読み解いています。

考えてみれば、漱石は同時代を生きている人々に向けて作品を発信していたのだから、百年後の僕らにはわからないメッセージも含まれているはずだ。

だから、こういう作業が必要なのも頷ける。

けれど本書の一番の見どころは、何といても第3章:「ロンドンでの構想」だった。

ここでは1章を割いて、漱石のイギリス留学のことが扱われている。小説を書き始める前に訪れた異国の地で、彼は何を考えたか。

まず、知らなかったのが、漱石がデビュー作を書く以前に、文学研究者として、自分なりの「文学論」を構築していた、ということだった。

それを大成できたのが、本書によればロンドン滞在時だった。

カギとなる人物として描かれているのが、ロンドンで漱石と交流があった池田菊苗という化学者だ。

菊苗との交流の様子を示す資料の検証を通して、著者はある仮説を導く。

それは、物質の性質を決めるエッセンスとして分子や原子というものの存在を想定する(まだ原子論は証明されていなかった)物理や化学に感化され、漱石は文学のエッセンスについての自身の理論を作ったのではないか、という仮説だ。

池田菊苗がうま味成分である[グルタミン酸ナトリウム](#)の発見者であることにかけて、

菊苗の発明が「味の素」だから、たとえるならば、漱石は文学の素を発明したことになる。(p.80)

などと、ちよつとうまいことを言っている。

文学の素、つまり、漱石が求めていた「文学とは何なのか」に対する答えを、漱石は社会学や心理学の勉強を通して得ることができ、それがのちの、著者の言葉で言えば「明治の時代精神」を捉えた作品を生み出すバックボーンになった。

どこまでこの読みに信憑性があるかはわからない。

でも、この池田菊苗と漱石の文学論に関する著者の仮説には、鳥肌が立った。

こういう頭の使い方、つまり異なる分野が、歴史的にどういう交流を経て新しい理論なり概念を生み出してきたかをたどるアプローチを、著者は「学説史」([history](#) of ideas)とよぶ。

文学と科学を行き来できる硯学たちが跋扈していた明治時代は、まさに「学説史」が面白い時代なのだろうし、なかでも漱石は、恰好の題材なのかもしれない。

本書を読めば、とくに科学に親しみのある理系の人にとって、夏目漱石という人の重要度が高まるに違いない。

漱石といえば

「吾輩は猫である」という方も多いかもかもしれませんが、

漱石と言えば「坊ちゃん」、

何故なら「坊ちゃん」の舞台となった四国の松山に、

松山の人々にとって坊ちゃんは小説の中の人物ではなく

実在した有名人であるかのような存在、

ここで坊ちゃんが団子を食べたとか、

この電車に乗ったとか、

この温泉に入ったとか、

ここでマドンナを見かけたんだとか……

全てが現実感を持って町のそこそこに存在していました。

それもこれも「坊ちゃん」が

松山で英語教師をしていた頃の

漱石の体験に基づいて書かれた青春小説

だと思われているからでしょう。

松山ではこうした曲解もある意味許されるのかもしれませんが、  
本著によるといわゆる評論家という人々によっても  
漱石の真意は解明されてきていないようです。

ではその真意とは？

それは「坊ちゃん」の本質は諷刺小説であるということ。

諷刺小説と言われれば、  
成程、当時の田舎の中学校の古臭い体質を  
青年教師が暴いて懲らしめる痛快小説、  
つまりはそれが諷刺ね、  
と短絡的に繋げてしまいそうですが、

漱石の真意はもっと深くてもっと明確なものであると  
本著は解明してくれます。

そしてその真意解明の根拠としては、  
「坊ちゃん」が書かれた当時の詳細な政治背景、  
漱石自身の言葉、漱石の文学の基礎となっている英文学、  
それを基に彼自身が書いた「文学論」など  
様々な観点が挙げられています。

(何をどう諷刺していたかについて明かすと  
ネタバレになるのでここには書きません。

どうぞ本著をお読みください。

読めばダビンチコードならぬ、まるで坊ちゃんコード、  
赤シャツやマドンナなどの登場人物や  
あの有名なターナー島の松などが  
何を指し何を諷刺していたのかまでが判明します)

漱石がこのような諷刺の形式で「坊ちゃん」を書いた  
社会的動機、或は文学的動機についても本著は言及していますが、  
これについては明治以降の近代史について  
現代のわれわれはもっと学び直す必要があります。

明治時代とは江戸時代の鎖国政策から解放され  
維新により世の中が明るくなり  
人々は自由に文明を謳歌していた時代  
だったかのように想像しがちですが、

大日本帝国憲法の制定、出版条例の改定、発行停止、  
発禁処分や言論弾圧が横行する社会・・・  
それがひいては帝国主義、日露戦争、満州事変、  
太平洋戦争に繋がっていったのかと思うと、  
v 明治150年なんて浮かれていられない気がします。

本著を読んで  
「苦悩するハムレットのように、  
精神異常をよそおうのではなく、  
剣ではなく、刺すのではなく、  
つまり無鉄砲な坊ちゃんのように、  
滑稽をよそおうことで、  
諷刺することで、笑い飛ばすことで、  
悪は葬り去るしかない」

と漱石が深慮遠謀していたと知れば、

あの「坊ちゃん」或はその他の漱石の本を  
再読したくなるのももっともだと  
分かりますよ。

漱石の『ころ』から導き出した条件ともいえる9つの項目(サマーセット・モー  
ムからのパクリ)をどう見られますでしょうか。

本文221ページをそうしたことを念頭において、読まれることをおすすめいた  
します。

- 
- 1・読者を引き込む物語性
  - 2・作者自身の生活意欲が脈打つ作中人物
  - 3・主題が世間の関心事 一生と死、善悪、愛憎、野心、金銭欲など
  - 4・作者独自の見方
  - 5・素直な技法

- 6・思想は得てではない
  - 7・観察力
  - 8・作者が登場人物になりきる
  - 9・作者が自己中心的
- (P183・184)

大体、以上です。